

鴻 koh

月刊俳句誌

令和2年9月1日発行

(毎月1回1日発行)

第15巻第9号 通巻171号

9 月号

2020



師の声を遠く確かに薯の花

一筆写経納めて梅雨に入りにつけり

下闇の深きところに座すもよし

徳川の廟所の藪蚊打ちにつけり

墳山の四葩四葩の道をゆく

七夕竹呟くやうな雨がくる

ゆうらりとゆうらりと投網打つ肌

暑氣払ひかも一刻の雨の修羅

上族の村に大きな喪が一つ

梅筵追へど追へども雀くる

菜殻火の二筋三筋杣の暮

炎天に切字といふはなかりけり

妻の忌をよき郭公の声とゐる

二筋三筋

主宰作品

増成栗人

詩 作品抄

札に書く蘇民将来麦の秋 伊藤 隆

和宮御廟のうしろ青葉木菟 水沢和世

甲冑も漢書も寺のお風入 北村 操

月山の風はいつしか青田風 伊藤啓泉

四世代九人家族の家に虹 小林和子

男には男の美学青胡桃 相川 健

ベートーベンの四重奏曲雨季に入る 北原沙織

生きてゐるかたちに吹かれ蛇の衣 山内宏子

夕立やローストビーフに三時間 北城美佐

雲梯の列のしんがり夏の蝶 神野未友紀

蜘蛛の網いつか一人の夜が来る 吉清和代

涙花のやさしく丈を伸ばしけり 井上つぐみ

葉隠れに実梅が一つ人を恋ふ 佐藤あさ子

ボタン二つ外し四葩の風の中 田邑利宏

紫陽花や女五人の油絵展 足立枝里

梅花藻の花一斉に立ち上がる 畑田久美子

夏の日や羽田に残る煉瓦堤 鈴木 崇

水切りの子にとうとうと雲の峰 藤原明美

花檮青空に底なかりけり 遠藤 泉

青水無月裸婦のモデルが足を組む 野村昌代

増成栗人 選

山崎正子

まつすぐな杉の参道南吹く
 郭公の二声三声阿弥陀堂
 箒目の波さらさらと青葉寺
 日溜りの螢袋のなかに虻
 翡翠に林中の黙深々と
 言の葉を忘じるほどの岩清水
 新緑の翼の下に歩をとどむ
 ほととぎす芭蕉と曾良のゆきし道

潮の香の来る方へ吹く草の笛
 浜昼顔トランペットの音がとどく
 萱草を刈りのこしたる草刈機
 草ロール運ばれて夏たけなはに
 背山前山育ち盛りの雲の峰
 八百八島すつぽりと夕焼中



昨年の台風の爪痕の残る古刹を弘子さんと尋ねた。
 境内は人影もなくひっそりとしていた。まず目に入っ
 たのが真新しい魍魅だった。魍は虎の形の山神で魅は
 沢神と言う。賽銭を投げ、ゆっくり時間の流れる一日
 であった。

「扇」は扇子とも言い、煽いで風を起こし涼をとる道具であるが、昔は儀礼、装飾用としても使用されてきた。

その構造は、幾本もの竹、木、金属、象牙などを骨とし、それを要で綴り合わせ、広げて布や薄い紙を貼り、折り畳みの出来るようにしたものである。この形式は、既に平安時代に出来上っている。

夏炉冬扇、扇状地、秋扇、団扇、舞扇などの熟語がある。

秋扇音を大きく閉ぢにけり 鴻司

扇

特集



俳句に詠まれた扇

佐藤あさ子

団扇は奈良時代中国から伝わり、扇は平安時代初頭日本で創案されたと言われます。

白団扇隣の義之に書かれたり

大江丸

五十聳天窓をかくす扇かな

一茶

白扇もつばらに虫払ひをり

後藤兼志

ほほえましくも滑稽味のある、おおらかな人柄が偲ばれる作品です。

三山よりの団扇は赤き洪団扇

吉田鴻司

嬬座なる荒々しきは洪団扇

間中恵美子

洪団扇とは柿渋を表面に引いた丈夫で大きめの団扇のこと。雑用に使われました。

「団扇」と問われれば黒田清輝の「湖畔」と応えましよう。湖（芦ノ湖でしょうか）を背景に団扇を手にする浴衣姿の女性の絵。黒田夫人をモデルに描かれたそうです。

ころあひに辞すが難し喪の扇子

田中一光

通夜の座に北斎の画の扇子かな

赤峰ひろし

弔いの席、頃合を見て扇子を閉じ、腰を屈めて辞す

先師の姿が浮かびます。

富士の風や扇にのせて江戸土産

芭蕉

渡し呼ぶ草のあなたの扇かな

蕪村

恋歌は下の句に凝る京扇子

加古宗也

富士山の風を土産とは気の利いた機知、粋ですね。蕪村の句、草隠れに扇がひらひらと渡しを呼んでいたのでしょう。

扇風機大き翼をやすめたり

山口誓子

天井に回転する扇風機です。虚子は掲句について扇風機の動から静への観察を、従来の俳句の思いも及ばなかったところに素材の新を求め、俳句の領域を広げた誓子俳句の特色の一つと言っています。

花よりも鳥美しき秋扇

後藤夜半

褒められてばかりの日なり秋扇

宇多喜代子

日本列島雨なり扇しまひけり

増成栗人

秋扇には盛りを過ぎた哀感が漂う。「扇」はこれ程に深く深く詠まれています。

扇がたに蘭草干さるる土佐の国 稲瀬奈加枝
私の街政宗の仙台に扇町、扇坂という優雅な地名があります。仙台駅を中心に扇町は東部の仙台湾に近い平坦な地域、扇坂とは通称で、西部の青葉城址に隣接する青葉山丘陵地から市街へのなだらかな坂道を言います。その坂近くに住み丘陵の頂に勤務地があった私は、歩いて通うこともありました。

私達は今新型コロナウィルスの渦中であって、ウィルスとの共生を模索し生活をしなければなりません。その様な中今回、様々な心あたたまる句に出会うことができました。

さう言へばと妻が一と言団扇置く

小澤 冗

「下諏訪・俳句の俳は俳優の俳」 鈴木 崇



昨年、旅行で下諏訪を訪れた。中山道と甲州街道が合流する宿場町の風情を残しており、街道沿いの家屋や旅館の前には温泉を気軽に楽しめる鉢や足湯スポットが設けられている。諏訪大社下社秋宮の境内近く、蔵が立ち並ぶ路地で句碑を見つけた。夕顔やろじそれぞれの物がたり

小沢昭一

なぜこんな所に小沢昭一の句碑が？と思ったが、小沢の代名詞とも言えるラジオ番組「小沢昭一的ところ」で所縁があり、建てられたものだという。諏訪は小沢のお気に入りの地で、老舗旅館の露天風呂に浸かって思わず「天国だあ」と叫んだと番組筋書作家の回想記にある。

小沢のラジオ番組は飲食店で流れているのをなんとなく耳にしていたり、著作もいくつか読んでいたりしたので、ひょんなところで句碑と出会えたのは存外の喜びだった。小沢昭一は、俳優、エッセイスト、放浪

芸研究、ラジオパーソナリティなど、さまざまな顔を持つ、異能の人である。俳号 変哲の俳人でもあり、永六輔や矢野誠一、柳家小三治など著名なメソバールと「東京やなぎ句会」を四十年以上にわたり行っていた。

寒釣や同じ顔ぶれ同じ場所

縄とびを見ているだけのメガネの子

ロッパ観てホットケーキの日比谷かな

小沢昭一

うらぶれた釣り堀の常連衆、路地裏の子供たちのスナック、軽演劇の華やかなりし時代、「小沢昭一的風景」と書いたくなる場面をとらえている。

俳句の「俳」は俳優の「俳」。「俳」は、

たむむれ、おどけ、おかしみを表すと小沢

は書いている。

俳優の俳句といえば、渥美清の俳句は独特の光を放っている。

俳号風天。定型にとられない、ぶつき

らぼうな詠みぶりには、浅草で下積み時代



下諏訪・小沢昭一句碑

を過ごした役者らしい凄味がある。晩年の渥美は尾崎放哉や種田山頭火を演じるのが悲願だったという。

好きだからつよくぶつつけた雪合戦
マスクのガーゼずれた女や西の市
村の子がくれた林檎ひとつ旅いそぐ

渥美清

不器用な少年時代のノスタルジー、六区から驚神社あたりの猥雑さ、優しさに立ち止まることなく、いや、優しさに触れたからこそ旅を急ぐ「寅さん」の後ろ姿。本名：田所康雄、芸名：渥美清、役名：車寅次郎、彼のいくつものパーソナリティが俳人・風天に凝縮されている。

小沢昭一の著書「ぼくの浅草案内」は、私の浅草散歩に必携の冊だ。小沢は隅田川七福神の一つ、弘福寺に眠っている。向島の花街に面し、三味線のチンドンが聞こえてくるエリア。なんとも「小沢昭一的風景」である。



羽音集

増成栗人 選



水切りの子にとうとうと雲の峰
日盛りを来て白鷺の立つ入江
あぢさゐの大きな毬に触れてみる
鮮やかに咲く籠り日の百日紅
水槽の熱帯魚見て嬰は寝付く
花檮青空に底なかりけり
子が爺を追ひ麦秋の野を駈ける
離れたくなし梅檀の花の下
植糸終へし学校田に子等の来て
薔薇深紅宅急便のくる時間
はつなつやハンカチの木の唄ひだす
木銚のぐいと広げる梅雨晴間
羽抜鶏段差に声を掛けらるる
蜘蛛の網いつか一人の夜が来る
ノーといふ返事が届く著莪の花
風鈴が佃小路の風誘ふ
十葉の踏み石縫うて咲き揃ふ
東雲の静寂の中の時鳥
夏落葉異国の顔の羅漢像
天を突く北山杉に青嵐

船橋 藤原明華

大阪 遠藤 泉

松戸 吉清和代

流山 中内敏夫

茶庵閑話

虫丸



吟行では
どうしても
その土地の
名が入った句
ばかりになって
しまいます

ある人に
土地で詠むな
土地を詠め
とも言われ
ました



歴史や講れをもった地名
はそれだけで
詩情をもって
いる
それだけに何でも
かでもまず地名をといっ
のではなく

吟行だからこそ
なおさら
自分の五感に
触れてくるものを
身の内で咀嚼
することを
心掛けるべき
だよ



そこから生れた
何かの発見に
地名が重なる
ことで
句の趣が
深まるときに
地名は詠まれる
べきだろうね

土地を
咀嚼して
からか
!!



土地を
咀嚼しきれ
なくて

胃が
クルシ
ク!

ただの
食へ過ぎ
だよー